

- こそ進歩の源泉
- 既製の分野に閉じこもり守りの姿勢になっては、魅力もなくなり枯渇してしまう。
 - 研究の最前線に飛び出す条件、練習訓練ヒットとホームラン
 - 鍛えた基礎力の上にチャレンジ精神で次の時代を切り開いてほしい。
 - 真のインテリとは？ 専門家はいるが良質のインテリは少ない。
 1. 既成の概念にとらわれない自由な発想
 2. 文章やコメントには必ず独創的・人を動かす新しい発想がある
 3. 先見の明
 4. 人にへつらわないで、自分の意見がいえ
 5. 相手の意見で自分より気がつかなかった視点があればすぐに改められる
 6. 段階をきちんと捉えられる
 7. 客観的な事実と自分の希望や主観的な考え方を混同しない
 8. 議論のやり取りができるキャッチボールのある議論
 - 文系理系って何だろう???
 - 女性と学問と生活、科学の意味と進歩の方向

福山 秀敏
(東京大学物性研究所長)

第一部
「物性科学の魅力と展望」

大学院進学の際には、ご多分にもれず湯川・朝永効果で「素粒子」に憧れをもっていました。1965年久保研究室に加

わりましたが修士時代当初は、つまらなくて「登校拒否」もしました。今にして思うと、テーマが合わなかったのと、久保先生が「そんなことをして何の役に立つの？」という言われ方をよくされたのが気になりました。研究は「真理を探究するものであって、役に立つか立たないということを考えるべきではない」と信じていましたから。久保先生の言われたのは「そのようなことを議論して何か本当に大事なことがわかるようになりますか？真理に近づくために役に立ちますか？」という意味でしたが、未熟な私は「役に立つ」の意味を取り違えていたのです。(それがわかるようになったのは大分後になってからです。)しかし、ほどなく興味あることが出てきて、博士論文を書く頃には熱中することが沢山ありました。その中には、30年来の不思議であった「Biの反磁性」の解明もありました。大学院時代には斯波さんを始め良い先輩に恵まれ、叱咤され激励されました。研究室にいる先輩は身近で近い年齢ですから、お手本になりますから、影響は大きいです。久保研究室では、たくさんの輪講をし、論文を読み、計算もし、理論家としての基礎的学力の充実はもちろん、どんなにきれいな理論でも必ず実験との関連を意識することの重要性を学びました。東北大学の助手になって2年目にアメリカに出張しました。最初ハーバード大学、ついでベル研究所で計3年弱です。ベル研究所で、物性物理の醍醐味を味わいました。そこでは、常に最先端の実験が行われ、理論はそれを問題にしていました。Andersonをはじめすごい研究者達が昼食中や廊下で大声をあげて議論していました。議論することの重要性楽しさを体験すると同時に、自由なパーティも頻りにあり、Platzmanを通してアメリカ人のすばらしい側面を十分見させてもらいました。以後、その「実験あつての理

論」のパターンを人間的な接触を通して保とうとしています。理論家として、実験家から不思議な事実を最初に紹介してもらうことは大変な幸せです。物性研究は物質を対象としていますから、絶えず、新しい驚くべき現象に遭遇する可能性があります。これからは生体関連物質も研究対象になってくると思います。研究対象がどのように変わろうとも、物性物理学的な研究の重要性は変わりません。むしろ、より重要になるでしょう。逆に言うと、研究対象を科学の進展にそって変化させることが重要です。物性物理には「実験科学」としての物理学の形態が絶えず保たれていますので、思考だけの抽象論による袋小路にはいる可能性は少ないです。(この点で、最近ともすると計算機に頼り切ったような研究が多く見受けられることには危惧を感じます。)

第二部 「大学（院）の教育環境、 研究環境」

大学院教育はすべての教育がそうであるように結局は人間教育です。知識だけの受け渡しではありません。そのような観点から、最近の学生は、どのような基準で研究室選びをしているのでしょうか？知的消極性を一般的に感じます。それはもとはといえば大学教官の問題でもありますが。この問題を解決するためには、輪講・セミナーを通しての学生間での切磋琢磨はもちろん、情報交換・連携を強めるべきでしょう。制度的な問題については大変革をもたらす可能性のある「国立大学の法人化」の内容がどのようなかにかかっています。